

情報リテラシー科目に対応した Web クイズの開発と授業への導入方法別の解答問題数を用いた結果分析

谷口 るり子*

Development of Web Quiz for Information Literacy Course and Analysis of Result Using the Number of Problems Answered According to the Way to Introduce it into Class

Ruriko TANIGUCHI*

1. はじめに

情報リテラシー関連の講義では、英語、英語由来のカタカナ語、英語の略語が多数でてくる。しかし、英単語を示しその日本語の意味を解答させる 5 択の問題を用いた調査の結果、英単語の意味を理解していない学生が多いことがわかっている⁽¹⁾。この状況で、英語やカタカナ語や英語の略語を講義で使えば、英単語の理解度不足のために講義を理解しづらくなる学生が多数発生する可能性がある。そこで、コンピュータの基本用語を自習・復習するための Web クイズ形式の e ラーニング教材を開発した。本論文ではまずこの教材の内容を説明する。

e ラーニングを利用するとさまざまな学習履歴を取得することができ、これを学習者の学習活動を分析する際に利用できる。本研究のような Web クイズ形式の教材の場合、クイズの解答問題数を分析に使う場合が多く、例えば安達⁽²⁾、宮地ら⁽³⁾、谷口⁽⁴⁾が解答問題数と試験得点の間の相関を調べている。

本研究もクイズの解答問題数を用いた分析を行うが、自習用の問題の場合、学習者への問題の出し方や学習結果の成績評価への組み入れ方によって学習活動に違いが出る可能性がある。そこで、開発した Web クイズ形式の教材を授業に導入する際、3 通りの方法

を順にとった。本論文では、方法別に授業実践結果とアンケート結果を分析することによって、開発した教材の有用性を示し、さらに授業への導入方法の違いの影響を考察する。

2. 対象

本論文の対象科目は、2012・2013 年度の“情報処理のしくみ I・II”という大学の情報デザイン学科 1 年次生を主な対象にした情報リテラシー関連の必修の講義科目である。ここで“I”は前期、“II”は後期の科目である。そして、分析対象者は期末試験を受験した学生とした。つまり、以下の章に示す学生の取り組み結果に関するデータはすべて、期末試験を受験した学生のみを対象としている。試験受験者数（分析対象者数）と授業の受講者数を、実践結果をまとめた表 1 に示す。

3. 開発した Web クイズ形式の教材

2012 年度は、“情報処理のしくみ I・II”の授業に実際にでてくる英語、英語由来のカタカナ語、英語の略語の中から学生が知っておく必要のある語を選び、本教材の題材とした。問題は、英単語の場合はその日

* 大阪国際大学グローバルビジネス学部 (Faculty of Global Business, Osaka International University)

受付日：2015 年 2 月 13 日；再受付日：2015 年 5 月 24 日；採録日：2015 年 7 月 28 日